

Kビジョン放送番組審議会（2020年9月30日）

放送番組審議会(第23期第1回会合)では、『風のエール ～新米キャスターがたどった3.11の記憶～』と『終戦特別番組 平和を語りつぐ』を合評しました。

<合評番組>

■風のエール ～新米キャスターがたどった3.11の記憶～（43分）

2020年4月27日(月)～5月1日(金)放送

2019年4月、宮城県仙台市出身の佐々木美帆がKビジョンに入社した。中学2年の時に東日本大震災を経験し、津波によって幼なじみを亡くしている。地元から約1,000km離れた山口県のケーブルテレビ局で働き始めた彼女が、被災者として、キャスターとして、震災を見つめなおしていく姿を追いかけたドキュメンタリー番組。

■終戦特別番組 平和を語りつぐ（1時間）

2019年8月26日(月)～30日(金)放送

終戦から75年。戦争当時を知る人が少なくなっていく中で、戦争の恐ろしさと平和の大切さを伝えるために企画した特別番組。空襲を体験した女性のインタビューや、戦地へ赴いた父親の日記から戦争について考え伝えようと活動している人など、さまざまな立場から平和の尊さを考える。番組では視聴者から戦争体験手記を募り、地元高校生の朗読によって紹介している。

<合評内容>

■風のエール ～新米キャスターがたどった3.11の記憶～

- ・震災当時の様子や感じたことが雑談のような会話の中で語られることによって、災害を身近に感じた。
- ・Kビジョンと被災地、取材を通じた社員同士の関係など、多くの“つながり”を感じることができた。恩師と再会するシーンがあることによって、佐々木さんが過去と向き合い、未来に向かっていこうとする姿が見えた。
- ・佐々木さん自身が取材した企画については、盛り込まれている内容が多い印象を受けたので部分的に文字テロップでまとめる等して簡潔にするともっとわかりやすかったのではないかな。
- ・番組を最後まで見たときに「風のエール」というタイトルの意味がわかり良かった。
- ・自分の気持ちをストレートに言える佐々木さんのキャラクター性が良かった。
- ・登場人物は多いが、それを感じさせない番組の組み立てになっていた。
- ・見づらい映像や音声聞き取りづらい場面もあったが、それによって臨場感が生まれていた点は良かった。

- ・ つらい経験をしていることと、佐々木さんの明るさの対比が気になった。もともと明るい性格なのか、震災体験が影響しているのか。
 - ・ これからKビジョンがどのような立ち位置で震災を伝えていくのか。他局にはできない報道を期待したい。
- 等のご意見をいただきました。

■終戦特別番組 平和を語りつぐ

- ・ 戦争の体験手記を高校生が読むという演出が良かった。手紙の内容が文字テロップで表記されているのもわかりやすかった。
 - ・ 朗読は光丘高校だけでなく他の学校にも呼び掛けてみたらよかったのではないか。
 - ・ 戦争体験者のインタビューを聞いて、体験談を残していくことの大切さを感じた。
 - ・ 体験者のインタビューは当時の様子がわかりやすく伝わってきた。体験したからこそ伝わってくるものがあり、言葉の力を感じた。
 - ・ 室積さんの話が印象的だった。
 - ・ 光空襲や徳山大空襲など、当時の地元の様子について知ること、伝えていくことの必要性を感じた。
 - ・ 放送時間は長かったが、いくつかのブロックに分かれており、高校生の朗読が挟まることによって最後まで視聴することができた。
 - ・ 手記や体験談は今回だけでなく、今後Kビジョンのフィールドワークとして継続していくべきだと思う。
- 等のご意見をいただきました。

出席者は、徳永豊委員長、なかはらかぜ、西岡雅宵、友田隆、佐野三和子の各委員、社側から杉田昌士代表取締役社長、矢田民也専務取締役、ほか放送制作部員3名でした。